

いちじゅくの木

小川未明

青空文庫

年とし郎ろうくんと、吉雄よしおくんは、ある日ひ、学がっ校こうの帰かえりにお友ともだちのところへ遊あそびにゆきました。そのお家うちには、一本ほんの大きおおくないちじゆくの木きがあつて、その木きの枝えだを差さして造つくつた苗木なえぎが、幾いく本ほんもありました。

「この木きを持もつてゆかない？ 二、三年ねんもたつと実みがたくさんなるよ。」と、友ともだちはいいました。

「ほんとう？ そんなに早はやく、実みがなるの。」と、二人ふたりは、おどろきました。

「ほんとうさ、このいちじゆくは、とても大きおおくて、うまいんだよ。」と、友ともだちは、自じ慢まんしたのであります。

「そうかい、もらつていつて、植えるから。」と、二人は同じく
らしいの苗木を一本ずつ、ぶらさげて、お家へ歸つたのでした。

年郎くんは、その小さい木をどこに植えようかと考えました。
「圃にうえようかな、土がいいから、きつと早く大きくなるだろ
う。」といつて、圃に植えたのでした。

吉雄くんも、その木をどこに植えたらいいかなと考えました。

「庭のすみに植えてやろう。そう早く大きくなりはしないだろう

から、邪魔になりはしない。」といつて、庭のすみに植えました。

圃に植えた年郎くんのいちじゆくは、日当たりがよくまた風

もよく通つたから、ぐんぐんと伸びてゆきました。翌年には、

もう枝ができて、大きな葉が、地の上に黒い蔭をつくりました。

すると、小鳥ことりがきて止とまりました。また頭あたまの上うへを高く、白しろい雲くもが悠ゆう々ゆうと見み下おろしながら、過すぎてゆきました。

丹精たんせいして、野菜やさいを作つくっていられたお祖父じいさんは、

「おどろいたなあ。」と、おっしやつたけれど、木きは、そんなこ
とに関かん係けいなく、ぐんぐんと大おおきくなりました。そして、三ねん年め目
からは、ほんとうに、実みがたくさんになりました。

吉雄よしおくんの植うえたいちじゆくは、庭にわのすみで、ほかの木きの下したに
なつて、日ひがよく当あたらなかつたので、いつまでたつても実みがな
りませんでした。

「私わたしを、こんなところに植うえたんだもの。」と、木きは、不ふ平へいをい
いつづけていました。

ある夏の^{なつ}こと、ちようど休暇^{きゆうか}が終^おわりか^おけるころから、年^{とし}郎^{ろう}くんの家の^{いえ}いちじゆくは、たくさん実^みを結^{むす}んで、それは紫^{むらさき}いろ^{いろ}に熟^{じゆく}して、見る^みからに^おいし^いそう^うだ^つた^のです。

ちようど遊^{あそ}びに^きた^た吉^{よし}雄^おくんは、これ^を見^みて、びつくり^しま^した。

「これは、いつか、もらつてきた木^きかい？」

「ああ、そうだ。」と、年^{とし}郎^{ろう}くんは、誇^{ほこ}らしげに答^{こた}えました。

「こんな^おおに、大^おきくな^つたの^かな^あ、そ^して^こん^なに^たく^さん^実を^むす^んだ^のか^なあ。」

「君^{きみ}の家^{うち}のは？」

「僕^{ぼく}のうち^のは、ま^だ一^つも^実が^なら^ない^よ。」と、吉^{よし}雄^おくんは、

いいました。

「きつと、場所がいけないのだよ。」

「場所が？」

「これは、土がよくて、日がよく当たるから、早く大きくなつたのだと、お祖父さんがいつていらしたよ。」と、年郎くんは、いいました。これをきいて、吉雄くんは、はじめて、自分の植え場所の悪かつたのを悟つたのでした。

「果物は、日のよく当たるところでなければ、よく育たないとお父さんもおっしゃったよ。」

「じゃ、僕も、こんど日当たりのいいところへ植えかえてやろう。」といつて、吉雄くんは、自分のうちのいちじゅくが、くらべ

ものにならぬほど、成せい長ちようのおそいのをかわいそうに感かんじたのでした。

吉雄よしおくんは、お家うちへ帰かえつて、さつそく、庭にわの片かたすみにあつたいちじゆくの木きを、圃はたけへ移うつしてやりました。

「僕ぼくがわるかったのだ。さあ、早はやく大おおきくなつて、兄きょうだい弟だいに、負まけてはならない。」と、いちじゆくの木きに向むかつて、いいました。

吉雄よしおくんは、それから、よく木きに注ちゆう意いして、肥ひり料りようをやつたりしました。

すると、吉雄よしおくんのいちじゆくの木きも、ぐんぐん大おおきくなつてゆきました。そして、早はやくも、明あくる年としには、みごとな実みが幾いくつ

もついたのであります。

これを見て、吉雄よしおくんは、思おもいました。

みんな同おなじような頭あたまを持もつて、生うまれてきながら、よくできる人ひとになり、また、そうでない人ひととなるのは、やはり、この二本ほんのいちじゆくの木きのように、どこかに故障こしょうがあつたにちがいなかろう？ 自じぶん分の力ちからでできることは、よく反省はんせいして、注ちゅうい意いを怠おこたつてはならない——。

ほんとうに、あのとよしおき、吉雄よしおくんが、自じぶん分の木きはだめだといつて、そのままにしておいたり、もしくは、捨すててしまつたら、どうでしたでしょう。かわいそうに、その木きは、ついに、一つの実みすら結むすばずにしまつたにちがいません。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「いちじゆくの木《き》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

いちじゅくの木

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>